

## 参考文献

Putnam, Robert D. 1992. *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*. Princeton, NJ: Princeton University Press. (パットナム, ロバート・D. 2001. 『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』河田潤一(訳). NTT出版.)

直井里予. 『病縁の映像地域研究——タイ北部のHIV陽性者をめぐる共振のドキュメンタリー』京都大学学術出版会, 2019, 294+6+ivp.

HIVは人びとの日常生活や社会関係にどのような影響を与えたのか。映像を撮る者—撮られる者—観る者の相互関係の中で、現実はどうのように構成され、その関係にいかなる影響を与えるのか。この2つの大きな問いの解明に、映像作家であり地域研究者である著者が、自らの作品の内容およびその制作・上映過程の分析を通して挑んだのが本書である。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に受理された博士論文がもとになっている。

はじめに2つのことを断っておかなければならない。1つは、評者が映像の専門家ではないということである。映像についてはその道の専門家による評が別におこなわれるはずであり、本書評は北タイで医療関係の人類学的研究をおこなっている者の視点からのものである。もう1つは、評者が本書で扱われている2本のドキュメンタリー映画を、大変残念ながら観ていないということである。本書評はあくまで本書のみを読んだうえのものであることもお断わりしておく。

本書は、2000年から2014年までの北タイにおける現地調査(うち3年間の調査が1回、1年間の調査が1回、数カ月間の調査が4回)と、その間の合計202時間の映像撮影に基づいている。1980年代後半にHIV感染が人口の1%を超えるまでに拡大したタイは、その後、国家レベルでの対策により、発展途上国で最初のエイズ予防成功例とされる。2000年代には抗HIV薬の普及などもあり、

HIV/AIDSは慢性病として位置づけられる一方、エイズ孤児のケアなど新たな課題が生まれた。著者の主な調査地であるバヤオ県は、都市との所得格差により、1980年代から90年代にかけて出稼ぎが多かった(性産業に従事する女性も少なくなかった)ことなどを背景に、HIV感染率がタイ国内で最も高いことで知られる。

本書は2部構成になっている。第1部「HIVをめぐる関係のダイナミクス——ドキュメンタリー映画制作からの考察——」では、冒頭で述べた第1の問い、すなわちHIVをめぐる関係性に焦点が当てられる。ここで用いられるのが、本書のタイトルにも組み込まれている「病縁」という概念である。医療人類学者の濱雄亮が提唱したこの概念は、病いを通したつながりを指し、病いを共有しない人との関係性も含む。濱の研究が主にキャンプ場や病院など特定の場における糖尿病患者の経験を聞き取り調査をもとに記述・分析しているのに対し、本書では日常生活の場面においてHIVをめぐる関係性がどのように形成され、変容したのかを長期間の調査に基づき動態的に描いている。まず、第1章でタイのメディア、欧米や日本のドキュメンタリー映画、社会学や医療人類学などの先行研究において、HIV/AIDSの「悲惨さ」や「苦悩」に焦点が当てられてきたこと、そして近年、それとは異なるアプローチが生まれつつあることが確認される。その後、第2章で映画『いのちを紡ぐ——北タイ・HIV陽性者の12年』の内容をもとに、HIV自助グループの形成・弱体化・持続の様相が考察され、活動の主体が徐々に行政や病院側からHIV陽性者達へと移っていったことが明らかにされる。また、第3章では、一人の女性HIV陽性者の日常生活に焦点を当てた映画『アンナの道——私からあなたへ……(完全版)』をもとに、HIV陽性者間やエイズ孤児のケアのあり方、およびケアされる側であったHIV陽性者とその子どもたちがケアの担い手として変容していく過程が考察される。

第2部「映像表現の可能性と限界——『共振のドキュメンタリー制作』におけるリアリティ生成と制作者の視点——」では、2つの映画の制作・上映過程が自己再帰的に分析され、撮る者—撮られる者—観る者の関係性と映像との相互関係とい

う第2の問いが追究される。著者の主な関心はあくまでこの第2の問いであるように思われる。第I部では北タイにおけるHIVをめぐる関係性に関する先行研究が注で言及されるにとどまるのに対し、第II部では本文において映像論に関する先行研究と本格的に対話がなされていることがその証左である。文化人類学や社会学、および映像論においては、調査者（制作者）の視点・立ち位置・調査（撮影）対象との関係性が民族誌表象や映像表象（社会的現実）にいかに関与するかという議論や、その議論に基づいた作品制作の試みが蓄積されてきた。第4章で著者はその議論を整理したうえで、ドキュメンタリー映画制作者の視点関与に関する映像制作者自身による自己再帰的な考察の必要性を指摘する。

それをふまえ、続く章では映像の撮影（第5章）・編集（第6章）・上映（第7章）の各プロセスの分析がおこなわれる。それによれば、著者が時間をかけて村人との関係性を築いていき、村人たちと親密になることに伴い、撮影シーンや撮影手法が変化し、撮影者の視点も「死の恐怖と向き合うエイズ患者」から「HIV陽性者のポジティブな生き様」、そして彼・彼女らの生を支えている「社会関係」へと移っていった。そして撮影した映像を撮影対象者と一緒に観ることにより、撮影者の視点を相手に伝えることとなり、その後はその視点を把握した撮影対象者との協働作業による撮影となっていく。こうして撮りためた膨大な映像のどの部分を選び、どう並べ、つないでいくか、つまりどう編集するかによって、どのようなストーリーができあがるかが決まってくる。このプロセスには、先行映画の文法や撮影・編集技術の変化、フィールドの人びと向けの試写や国際映画祭での上映のリアクション、学术论文の執筆等がそれぞれ複雑に作用しており、著者がこれらを経て何度も撮影や編集をし直して2作品ができあがったことがわかる。また、映画上映後の観客とのディスカッションや映画専門家のコメントから、HIV陽性者の日常が「リアリティ」をもって受容され、観た者にとって「他者」としてのHIV陽性者が、自らの世界を構成する一員として存在する者に変化した可能性が示される。

こうした撮影・編集・上映過程にみられるさまざまなアクターの相互作用、影響関係、リアクションの連鎖等は「共振」という言葉で表現され、本書のサブタイトルにも組み込まれている。結語では、地域研究や文化人類学的研究における映像と文章の往還による共振のドキュメンタリー制作の方法論的な有効性が示唆される。

以上の概要をふまえたうえで、コメントを述べたい。まず、本書はエイズが慢性病化した後の社会でHIVと共に生きる人びとの日常を描くことを通じ、「苦悩するエイズ患者」の悲惨なイメージの脱構築に成功している。それに説得力を与えているのは、映画の内容のみならず、撮影者（調査者）と被撮影者（被調査者）の相互作用の中で作品が創り出されていくプロセスの分析である。映像や著作の中で描かれる社会的現実、あくまで制作者や著者がある視点で切り取った現実を過ぎず、視点によって、同じHIV陽性者でも「苦悩する悲惨なエイズ患者」としても「前向きに生きる一女性」としても描かれうる。そしてその切り取り方は、制作者（調査者）と被撮影者（被調査者）との関係性や対話のあり方によっても変わりうる。

こういったことに関する議論は、1980年代から90年代にかけて、映像論に限らず広く人文社会科学の分野で盛んにおこなわれ、調査する側の権力性や表象の政治性などが指摘されてきた。人類学ではそれをふまえ、さまざまな実験的民族誌も著されてきた。しかし、膨大なフィールドノートからどのデータをどのように選び、並べ、つないで研究成果を作成したか、そして学会等での発表を通じてそれをどのように修正していったかなどといったプロセスをも、本書のように開示し、リフレクシブに分析しているものは稀であろう。

また、本書からは、著者が撮影という行為の暴力性を自覚し、被撮影者との関係を壊さないよう、細心の注意と配慮を払ったことも読みとれる。とりわけ死や病い、しかも多分にスティグマを伴うHIV/AIDSというセンシティブなテーマを扱い、日常生活の撮影をするとなれば、それは容易なことではなかったであろう。最初は病院内の看護師寮に住み、アンナ（実名）の家に住み込んでの撮影まで1年間をかけたこと、一人一人に撮影や映像

使用の許可を取ったこと、寝室にはカメラを向けなかったこと、家出したアンナの夫は追わなかったことなどの記述から、その都度フィールドで困難かつ重大な判断を迫られたであろうことが推察される。このようなアプローチは、匿名化の徹底により倫理的「配慮」をおこなう（おこなったこととする）昨今の特に医療現場での調査とは対照的である。

他方、(著者は十分自覚していると思うが) 自助グループの活動を通じてポジティブに生きるという姿も、HIV陽性者のあくまで一側面にすぎない。現在のタイでも、HIV陽性であることを隠してひっそりと生きている人は少なくない。しかしそのような人にカメラを向けるわけにはいかなかったのだろう。もちろん、そのような人には調査すること自体が難しいため、文章での記述も容易ではないが、映像として記録することにはより困難が伴うであろう。ただ、本書では「苦悩するエイズ患者」の悲惨なイメージの脱構築を目指し、「HIV陽性者のポジティブな生き様」を強調するあまり、ひっそりと生きている人びとの存在が見えてこない。映像にはできなくても、文章で、せめてそのような人たちがいるということだけでも補足することは可能であったのではないだろうか。

また、本書を読み、撮影者(調査者)と被撮影者(被調査者)の相互作用をもっと詳細に知りたかったと思った。例えば、撮った映像を撮影対象者と一緒に観る作業を継続する中で、「撮影に関する意見交換が頻繁に行われるようになる」(p.152)とあるが、どのような「意見交換」があったのだろうか。また、撮影対象者が映像を観て初めて自らの言動について気づいたことがあった(p.200)と述べられているが、具体的にはどのようなことだったのだろうか。さらに、本書では「親密な関係を築いた」からこそ撮影できた点が強調されているが、だからこそ撮影できなくなったことはなかったのだろうか。こうしたことの詳細を分析していくと、「共振」の概念をより重層的なものに発展させることができるのではないかと考えられる。

些末な点では「ここでアンナが自らを『お母さん』と呼んでいるように、エイズ孤児の子どもたちの精神的ケアを通して、HIV陽性者女性らは、

エイズ孤児たちの母親的存在にもなっていった」(p.69)とあるが、北タイ女性は自分の子どもぐらいの歳の人に対しては自らを「お母さん」と呼ぶのが常である。おそらく著者は、アンナとエイズ孤児たちとの相互行為や関係性全体の観察に基づいて「母親的存在」と分析しているものとは考えられるが、「お母さん」という呼称についてはその根拠とならないように思われる。

ともあれ、今回、評者にとって何よりも印象的だったのは、随所に挿入されているQRコードによる参照動画を見ながら学術書を読み進めるという読書体験であった。それは映像と文章どちらかだけでは実現しない、双方を往還すればこそできあがる世界であった。映像の専門家でないためかもしれないが、このような体験をしたのは評者にとって本書が初めてであり、非常に興味深く感じた。こういった映像と往還する形式の著作物は、今後、映像関係の研究のみならず、広くフィールド調査に基づく研究や、教科書などにも増えていくのかもしれない。

そして評者は本書を読みながら、2本の映画を観たくてたまらなくなってしまう。これまで上映の機会を捉えられなかったことを悔やむと同時に、今後の上映会の開催を切に願っている。評者を含め、本書の読者も巻きこまれる「共振」のプロセスは今後も続いていくことであろう。

(飯田淳子・川崎医療福祉大学)

ジェームズ・ウェルカー(編著)、『BLが開く扉——変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』青土社、2019、299+ivp.

#### 本書の内容

BL(ボーイズラブ)とは、「男性同士の恋愛・性的関係を描く女性向けのメディアの一ジャンル」(p.9)である。アクターの大半は、ヘテロセクシュアルを自認するシスジェンダーの少女や女性で、彼女たちは自嘲的な意味で自身を「腐女子」と呼ぶ。BLの起源は、女性の性的主体性が社会的に認識され始めた1970年代の日本と考えられる。当初からBLは、女性の性規範を揺るがす意図的試み